

修復的対話　生きることは、対話すること

葛藤は共通財産、修復しながら生きる： 講師 修復的対話の会 代表 梅崎 薫 氏

埼玉県東部地区の埼玉高等学校教育相談研究会において研修を実施し、下記の感想を頂きました。

内容

前半講演会、後半：演習　13：30～16：30

前半：講義「紛争解決を生徒とともに学ぶ修復的対話サークル」

後半：演習「授業で実施できるトーキングサークルのキーパー体験」※6人ずつの4グループで実施

意見

- ・演習形式であったため、非常に学びやすかった。この実践を学校に持ち帰るにはまだまだ学びが足りないため、もう一度お願いしたい。
- ・大変素晴らしい研修だった。紛争解決とのタイトルだったが、教室で十分に機能するものだった。
- ・「聴く」は話しても聞き手も呼吸により心を落ち着けることができる出発点である重要性を再認識できた。生徒には「息」の漢字は「自分」の「心」と書くことを認識させているが、自分自身も意識をして生活したい。

「修復的対話サークル」の特徴と学校でできること

■修復的対話は犯罪に伴う被害を回復させるために始まった。しかし、今日ヨーロッパでは、地域福祉の対話として広がっている。お互いの多様性を認めあい、差別や偏見を乗り越えて、関係性を修復しながら、より良い暮らし、実りある人生を共に歩いていくためである。

■修復的対話サークルとはトーキングピース（話し手を示す物）を持っている人だけが話すという約束のもとに対話をする。参加者は輪になって座り、サークルキーパー（対話の担い手）が、トーキングピースを時計まわり、または時計の反対まわりで、隣の人へ順に手渡して対話を開始し、問い、終了する。参加者は、トーキングピースが手渡されたら話す番、それ以外の時は聴く番と、はっきり分けられているので、言い争いになることを防ぐことができる。

サークルは、すべての人が安心して平等に、対等に対話に参加できるように考えられた構造を持っており、この安全な場での対話が、参加者を導いてくれる。



■「修復的対話サークル」はどのように働くのか？

物理的な形式は、リーダーシップの共有や平等、繋がり、誰も排除しないというインクルージョン（包摂）を象徴している。問題や課題そのものについて話し合う前に、お互いを知り合うことを先行させ、人間関係を築く。抱えている葛藤や難しいことについて話し合うために、その前に情緒的なレベルでそれぞれの体験やエピソードを語りあうことで、聞き手に吸収されていく。

■学校でできること

学校は、教えることと学ぶことが自然に行われる場所である。教師による計画した授業を通しての教えられることと学ぶこともあれば、仲間の手や言葉によって教えられることや学ぶこともある。学校は、紛争や対立が日常的に起きる場所でもある。だからこそ、学校が紛争解決について生徒たちに教え、生徒たちが学ぶための完璧な環境を差し出して、その時に修復的対話サークルは授業に欠かせないツールとなるのである。

学校では、修復的対話サークルを使う用途は無限である。子どもたちに知識を伝え、内省的な対話の場を用意し、創造的で平和的に、紛争を解決するための不可解なツールとなる無限の可能性を秘めている。（参考文献：ケイ・プラニス著 梅崎薫訳 「リトルブック 修復的対話サークル」）



■研修会に参加して■

「修復的対話サークル」の研修会終了後の、全身が浄化されたような清々しい心地が忘れられない。その理由を考えた。グループメンバーが輪になり、与えられたお題をトーキングピース（話し手を示す物）をもった人だけが自分の考えを話す。グループの仲間が、否定や批判をせずに、じっくりと聞いてくれる。ただひたすら聞くのみである。その体験やエピソードとしての物語を、精神的にも情緒的にも受け止めるようになる。より思慮深い情緒の交換が人と人との相互理解となる。

「傾聴」の真髄を体感し、この「修復的対話サークル」は学校現場の多くの場面で行うことができると感じた3時間だった。

体験やエピソードを語ることは、つながりの感覚を強め、自分自身を振り返るセルフ・リフレクションを育て、参加者をエンパワーする。